

魅惑の探訪 豊臣期の大坂

エッゲンベルク城で再発見された大坂図屏風

16世紀中頃、ポルトガル人が日本に上陸して以来、スペイン人、オランダ人、イギリス人が相次いで訪れ、日本の芸術品は珍品として欧州に持ち帰られることとなった。 今日エッゲンベルク城に所蔵されている屏風絵は、そうして珍重されたもののひとつである。 これは本来、八曲屏風であり高さ182cm、幅480cmと、通常の屏風よりも明らかに大型である。 推定によれば、これは1660年から1680年の間にオランダ人から購入され、まずヨハン・ザイフリート・フォン・エッゲンベルク侯の市中宮殿で使われていたようである。 1754年に始まった城内迎賓階の改修時にこの八曲が解体され、当時流行した「インディアン・キャビネット(小間)」に、異国情緒の壁画と交互に組み合わせて壁の装飾として個別にはめ込まれた。 このようにして、この貴重な豊臣期大坂図屏風は今日まで保存されることとなった。

この大坂図屏風は、鉱植物の顔料を用いて紙に描いた伝統的な日本画法で、大和絵派の町絵師の一人によって仕上げられたものである。しかしそれ以上の詳細はわかっていない。 屏風絵は、おそらく慶長十二年(1607)から慶長十九年(1614)の間に描かれたものと思われる。 依頼主も不明だが、豊臣秀吉(1536-1598年)に近い大名からの依頼と推定される。秀吉は、低い身分の足軽から最も権力のある武将かつ支配者の地位に上りつめ、百年以上に及ぶ内乱を治めて国に平和と繁栄をもたらした。

屏風絵は、右から左へと順に第1扇、第2扇とよび習わしている。ここには大坂の景観が連続して描かれており、当時日本で最大かつ最も豪奢であった 大坂城 城郭だけでなく、町屋や名のある神社仏閣も見ることができる。 この絵からは、明るい華やいだ雰囲気が出てくる。 武士や町民も含めておよそ500の人物は、慶長年間(1596-1615)の特徴でもある大柄で色鮮やかな、個性的な意匠の小袖をまとっている。全ての建物が、感じのよい淡色でまとめられている。 さらに、金雲によって豊かに装飾が施されているが、これは町の様々な風景や時日の異なる出来事をひとつのコンポジションとしてまとめる際に、屏風絵で用いられる典型的な表現手法である。災厄や貧困などは全く描かれていない。

平和で栄華を極めたこの時代から慶長二十年(1615)の大坂城落城までの間の大坂城の姿や城下の情景を留めた絵は、現在ほとんど残っていない。 ゆえに、エッゲンベルク城の屏風絵は、豊臣期を記録した貴重な資料である。 しかしその描写は、現実をそのまま写し取ったものではなく、むしろ特色ある建造物や出来事をエレメントとして構成し、様式化した絵画と理解すべきである。 建物と人物の大きさの比例関係も、現実を離れたものである。 人物は必要以上に大きく描かれ、逆に建物や船は特別小さく描かれており、できる限りたくさんの事が絵の中に納まるよう配慮されている。これも屏風絵の特徴的な表現手法といえる。 さらに、城郭や社寺、また城下の景観などは簡略され、特定部分だけが象徴的に描写されている。

この大坂図屏風は、大坂城の北から南を俯瞰する構図を取っている。西方を描いた第1扇と第2扇には、城下の一部が見渡せる。 最も大きい場所を占めているのが、壮大な城郭である(第2扇から第8扇)。 北側は、淀川と大和川によって、西側は、運河としても利用された東横堀川が城の外郭をなしている。 南方と東方の地勢的な詳細は、構図上の理由から省かれている。 東方(第8扇)には、隣国の山城国にある神社仏閣が描かれている。 大坂城を守護するかのように城の周りに構図された社寺は、秀吉や秀頼の寄進で造営または修復されたり、花見や戦いの舞台となったなど、特別に豊臣家と関りの深い場所である。

秀吉は、自らの居城のある大坂を日本全国の政治と経済の中心とする計画であった。 しかし彼の死後、いまだ幼い秀頼(1593-1615)が率いる豊臣家は、徳川一族に覇権の移譲を余儀なくされ、その徳川家は、江戸を新たな権力の拠点に作り上げた。 しかしその後も数百年にわたって、大坂は日本経済の中心地として栄え続けた。

壮大なこの城郭は、天正十一年(1583)から慶長四年(1599)まで4回にわたる工期を経て完成した。この屏風は、慶長元年(1596)から慶長十二年(1607)間の大坂を描いている。当時この町は、日本における文化の中心としても発展を遂げていた。大名と大坂の町人たちは、国内外での通商のおかげで豊かな暮らしを送っていた。この栄華は、立派な建造物、種々の芸術、派手な着物の柄、またその他の分野にも反映された。たとえば、秀吉も茶人として発展に寄与した茶の湯など、新しい娯楽や芸術形態も急速に普及した。

当時の人々のしきたりや風習の数々と並んで、グラーツにあるこの屏風は、貴重な詳細描写でも際立っている。描かれた「極楽橋」は稀少であり、ここでは楼門形式の絢爛豪華な橋として描かれている。秀吉が舟遊びに使ったとして知られる「鳳凰丸」の描写は他に類いがなく、絵画化された「三の丸」も同様に他に知られていない。金雲は、三種の花模様がレリーフのように盛られ、三重の点粒線の縁を取り豪華に仕上げられている。

豊臣期は短くはあったが、日本の政治、社会、文化の発展に多大な影響を及ぼす計り知れない意味を持っていた。この屏風絵は、秀吉の没後に制作され、生前は日本最大の権力者であり、死後は神として祀られた天下人豊臣秀吉の権力と栄華を特に賛美したものである。



エッゲンベルク城 ジャパニーズ・キャビネット

エッゲンベルク城
ヨアネーウム州立博物館所蔵
エッゲンベルガー・アレー 90
8020 グラーツ、オーストリア
火曜から日曜 午前10時-午後5時
電話: +43 (0)316/8017-9532
www.museum-joanneum.at



魅惑の探訪、豊臣期の大坂

エッゲンベルク城で再発見された大坂図屏風

文責:
写真:
装丁:

Franziska Ehmcke
Nicolas Lackner
Andrea Weishaupt



Das Land
Steiermark
Der Landeshauptmann

Das Land
Steiermark
Wissenschaft

Steiermark
Landesregierung

BMW F

Stadt GRAZ

平等院鳳凰堂

天喜元年(1053)に完成した鳳凰堂は、宇治平等院で最も有名な建物である。今日なお、平安末期における最も優美な建造物とされている。池に囲まれた鳳凰堂は、阿弥陀如来の極楽浄土を現世に再現したものである。

本丸

本丸は、天正十一年(1583)から天正十三年に普請された。偉容を誇る天守は、五層の望楼型である。さらに隅櫓を伴う巨大な石垣が、豪華な本丸御殿を取り囲んでいる。

四天王寺

四天王寺のシンボルとして知られている西大門前の石の鳥居は、永仁二年(1294)に忍性上人(1217-1303)により建立された。極楽浄土の東門にあたると言われる。

住吉大社

この神社は、同じ形をした四つの本宮、その手前の反橋(そりはし)、それに右手にある石舞台から、住吉大社であることがわかる。

荒和大祓(あらにごのおおはらい)

旧暦六月晦日、住吉年中の大祭礼であった渡御祭である。長い祭行列を伴い、住吉大社のご神体を奉戴した神輿が、隣の港町堺(第1扇上部)まで渡御して再び戻ってくる。

船場(せんば)

大坂の中核として賑わった船場は、食べ物屋や魚屋が並び、遊びに興じる子供たち、大道芸人もいる。右の立派な神社は、おそらく仁徳天皇を祀る上難波の仁徳天皇宮であろう。

醍醐寺

山上と麓に、仏教建築物が描かれていることから、この寺はおそらく醍醐寺であろうと思われる。文明二年(1470)の応仁の乱でひどく焼失したが、秀吉とその息子秀頼がこれを完全に復興した。有名なのは、慶長三年(1598)三月十五日に、秀吉が醍醐寺で催した醍醐の花見である。正室、側室を伴い1300人を越える女人が参加したと伝えられる。

石清水八幡宮

男山の山上と麓に、石清水八幡宮は建立されている。祭神の八幡大菩薩は、朝廷から国家鎮護、王城守護の神として尊崇を受け、武家からも軍神として崇められている。

極楽橋

豊かに装飾が施された極楽橋は、仏教徒が、往生を願う阿弥陀如来の極楽浄土への橋を示唆している。この場所にこの形で存在したのは、慶長元年(1596)から慶長五年までである。後に橋上部の壮麗な建物は解体され、豊臣秀吉の霊廟である京都の豊国社に楼門として移築された。

三の丸

三の丸は、慶長三年(1598)から翌年にかけて普請された。その一郭である篠の丸といわれる曲輪は、二の丸への京口門を防禦するための構えである。巨大な石垣と門に囲まれたこの曲輪には、駕籠に乗った大名が見え、侍と小姓を従えている。

鳳凰丸と京橋

豊田秀吉は、奥方たちと好んで舟遊びを楽しんだ。ここでは、秀吉所有の鳳凰丸が描かれている。屋根の上の金の鳳凰、側面に描かれた白鷺、内側の柳の図などがその豪華さを伝えている。

川御座船と天満橋

淀川を多数の漕ぎ手で走航する早船は、豊田秀吉の川御座船である。船に張り回した赤幕にあしらった五七桐紋からそれとわかる。

東横堀川

運河としても利用され、多くの橋の架かった東横堀川は、大坂城西側の惣構(そうがまえ)であり、左の上町(うえまち)と右の船場をつないでいた。交通の要所は、一番下の「高麗橋」であった。この橋の上で、両替商が商いをしているのが見える。

部分詳細図



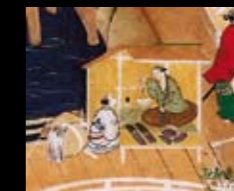
1. 八丁鉦(はっちょうがね)

大道芸人の中央に若衆が、八つの叩鉦に紐を付けて首から下げ、これを両手のT字形の槿木(しゅもく)で打ち鳴らしながら、首のところを中心にくるぐると早く振り回した。



2. 子供の遊戯

男の子が好んだ遊びに「棒打合戦」がある。二組に別れ、長い棒で互いに戦う。その左には、春駒に乗っている男児がいる。



3. 両替商

全国各地からの旅人が行き交う「高麗橋」の上で、両替商が、旅人に金銀貨を秤で量って銭に両替している。前には緞(さし)に通した銭の束が置かれている。



4. 鷹匠(たかじょう)

鷹の飼育と鷹狩は公家、将軍と大名の特権であった。豊臣秀吉も、多くの鷹匠を抱え、天正二十年(1592)には二十二名の鷹匠が知られている。その配下として数千人の鷹飼、餌差(えさし)、犬飼、鳥見、勢子の鷹狩衆を組織していた。



5. 高貴な女人

三人の女性が、被衣(かづき)をかぶっている。衣被(きぬかづき)ともいい、平安時代から身分ある女性が、外出時に顔をかくすために衣を被った。近世になると小袖をかぶるようになる。



6. 茶屋

草葺の茶屋では、坊主頭の主人が、客にお茶を一服供している。ちょうど、茶釜から柄杓で左手の茶碗に湯を注いでいるところである。屋根の上には、火事に備えて天水桶が置かれている。

